2008－CH－77　(6)
2008／1／25

漢字字体研究のための日本古字書データベースの作成

—観智院本『類聚名義抄』を例に—

池田　証寿
北海道大学
shikeda@Lit.Let.hokudai.ac.jp

（概要）日本には多数の古字書が伝存し、漢字字体の研究に有用なものであるが、平安末期のころに成立した観智院本『類聚名義抄』を例に、データベース作成上の問題点とそれを利用した漢字字体の研究方法について述べる。

Kanchiinbon-Ruijumyogisho database focusing on the standard of writing Chinese characters

IKEDA, Shoju
Hokkaido University

Kanchiinbon-Ruijumyogisho is a Chinese characters dictionary compiled by an unknown Buddhist in the late Heian period. We have made an image database of the entry characters in this dictionary. In this paper, we would like to discuss the problem on making this database and the method of researching the standard of writing Chinese characters using this database.

1　漢字字体研究と日本古字書

1980 年代まではコンピュータで扱える文字数は大きく制限されていたが、1990 年代に入ってコンピュータで多数の文字を扱う国際規格（ISO、Unicode）及び国内規格（JIS X 0208:1997 と JIS X 0213:2000）が開発・制定され、21 世紀になるやコンピュータで扱える漢字は飛躍的に増大した。しかし、これらの規格の漢字字体は、中国清代に編纂・公刊された『康熙字典』（1716 年）を基本とするもので、二次資料によるものである点に大きな問題があった。

『康熙字典』以前の良質な一次資料に基づく写本・版本に基づく漢字字体研究は、石塚晴通が中心となって推進する「漢字字体規範データベース」が嚆矢である（石塚他 2005 参照）。このデータベースは、歴史上、規範の転換をもたらす影響力の強い文献、規範を忠実に反映した文献を慎重に選択して編纂されたもので、『康熙字典』以前において規範としての位置を占めていた漢字字体がいかなるものであり、それがいかに推移してきたかを包括的に示す。この種のデータベースは、国内はもとより海外にも存在せず、難読字の解読や書道史の見地からなされてきた従来の研究とは一線を画している。

「漢字字体規範データベース」は、科学研究費補助金研究成果公開促進費の支援を得て、平成 16 年度より公開しており（現在 48 文献、4,390 字種、約 34 万字）、平成 18 年には「東洋文字文化の継承と発展に寄与する優れた業績」として「白川静記念東洋文字文化賞」を受賞している。

発表者の池田は、「漢字字体規範データベース」を維持・管理する漢字字体規範データベース編

纂委員会のメンバーであり、その内容をよく知るものであるが、一方では、日本で編纂された古字書（『篆隷万象名義』、『類聚名義抄』等）の研究を行い、近年は、これらの古字書に記述された漢字字体のデータベース構築を行っている（池田 2003、池田 2008 等参照）。

日本古字書は、国語学（日本語学）の研究資料として有益なものであるが、漢字字体の研究に関して言えば、見出しの字体そのものと、注文に見える「正」「俗」等の注記は、過去の字体規範を知る上で非常に重要である。ただ、日本古字書の多くは、中国側の小学書（字書・韻書・音義等）を主材料に編纂されているから、それらと綿密に比較検討することが必要で、この点に研究上の難しさがある。日本古字書に記述される日本語語彙（和訓）と日本漢字音（呉音・漢音）についての研究成果は多いが、漢字字体の研究は立ち後れている。石塚らの「漢字字体規範データベース」の成果を援用して、日本古字書を漢字字体研究に活用したいと思う。

2　観智院本『類聚名義抄』の内容と構成

『類聚名義抄（るいじゅみょうぎしょう）』は、国語学、特に国語史の研究資料として著名なものである。『大辞林』（第二版）に説明があるので、次にそれを引く。

> 字書。編者未詳。平安末期成立。仏・法・僧の三部に、漢字を一二〇の部首によって排列し、字形・字音・釈義・和訓を示す。釈義・和訓とも出典を明示する原撰本と、出典は示さず釈義が少なく和訓が多い改編本がある。両者とも和訓に付せられた声点（しようてん）は平安末期のアクセントを反映。名義抄。

諸本は、原撰本に図書寮本があり、改編本に観智院本・高山寺本・蓮成院本・西念寺本等がある。完本は観智院本のみである。観智院は真言宗東寺（京都市）の塔頭で、そこに伝わったものであるが、現在は天理図書館に所蔵されている。観智院本は、建長 3 年（1251）、顕慶の書写にかかる。覆製本は、風間書房版と八木書店版（天理図書館善本叢書）とがあるが、後者は原本の乱丁を正しており、ページが前後する箇所がある。また、風間書房版の漢字索引と和訓索引は、正宗敦夫の編によるものが周到・便利である。

構成は、仏・法・僧の 3 部に分け、仏を仏上・仏中・仏下本・仏下末の 4 帖、法を法上・法中・法下の 3 帖、僧を僧上・僧中・僧下の 3 帖、計 10 帖からなる。120 の部首の配列順序は次の通りである。

（仏上）　人彳辵匚走麦一丨十身
（仏中）　耳女舌口目鼻見日田肉
（仏下本）舟骨角貝頁彡髟手木犬
（仏下末）牛片豸乙兀収八大火黒
（法上）　水氵言足立豆卜面歯山
（法中）　石玉色邑阜土心巾糸衣
（法下）　示禾米丶宀勹穴雨門口尸虍广鹿疒歹子斗臥寸
（僧上）　艸竹力刀羽毛食金
（僧中）　厶瓜网皿瓦缶弓放矢斤矛戈欠又攴殳皮革韋車羊馬鳥隹
（僧下）　魚虫鼠亀鬼風酉雑

その全掲出語（項目）は約 32,000、和訓は 34,710、和訓のうち声点（アクセント）付きは 1 万、と数えられている（吉田金彦 1980 等）。

3　観智院本『類聚名義抄』データベースの作成

法上の本文冒頭を図 1 に示す。その本文の体裁は、1 面 8 行 4 段、32 格に区分し、1 格に 1 字または 1 語の掲出項目（見出し項目）を原則とする。掲出項目は、1 格に 2 字以上続くことや、注文が 2 格以上に及ぶこともある。掲出字（見出し字）は楷書の大字で、注文は小字 2 行割注で記載される。注文は頻用の漢字を略字で記す（「音」→「亠」、「也」→「丶」、「反」→「メ」、「俗」→「谷」等）。注文内容は、字体注（「正」「通」「俗」等）、音注（漢音は反切、類音注、呉音は類音注、片仮名注で注記）、意義注（漢文による釈義）、片仮名和訓が施される。注文がない場合や、一種類の注だけの場合も多い。「未詳」と注記することもある。図 1 の冒頭の 3 項目を翻字すると次のようになる。

水　尸癸反 ミツ（上上濁） カハ 月ーツキノサハリ
　　禾スイ（平上）

大ー　　海丶

岩清水　　イハシミツ（上上上上○）

「尸癸反」は音注（反切）で漢音、「ミヅ（上上濁）カハ」は「水」の和訓であり、「ミヅ」には声点が施される。「上」は高平調のアクセントであり、双点で濁音を示す。「月ー」は、「月水」の意で、「ー」は掲出字「水」と同じことを示す。「ツキノサハリ」は和訓。「禾スイ（平上）」は呉音を片仮名で記すもの。呉音は古く和音といい、「禾」は「和」の略字である。次の項目「大ー」は「大水」の意で、意義注が漢文釈義「海丶」（「海也」）で記される。「石清水」は和訓「イハシミツ」に「上上上上○」の声点が施される。声点は、平声（低平調）、上声（高平調）、去声（上昇調）、平声軽（下降調）等があり、それぞれ、平、上、去、平軽と略記する。

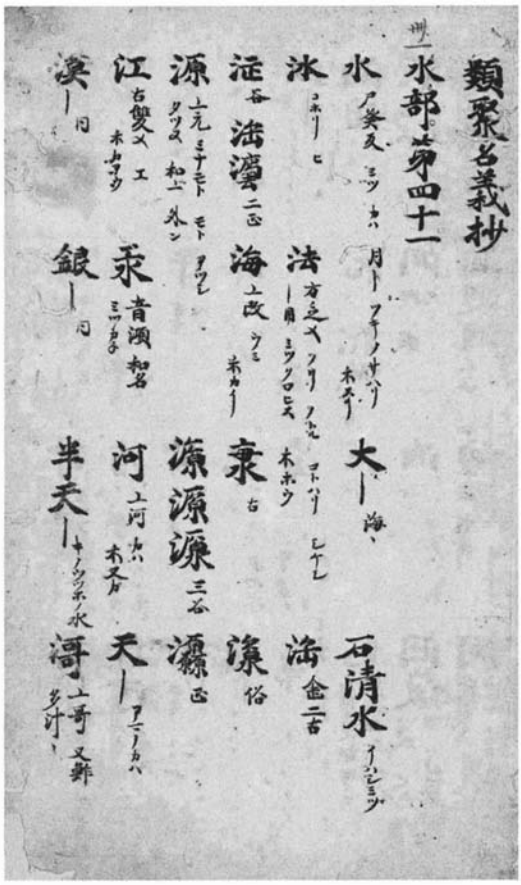


図 1　観智院本の水部冒頭部分

最終的には、これらの情報をすべてデータベース化したいと考えているが、現段階では、掲出字を一字ごとに画像として切り出し、その所在情報とを照合させたデータベースについて一応の完成を見たところである。現在は、次の段階として、それぞれの掲出字について、JIS 漢字、諸橋『大漢和辞典』番号等を付けている。

観智院本『類聚名義抄』データベースに基づいて、その掲出項目と掲出字数を算出してみよう。

その算出方法は、図の「水」「大水」「石清水」を 3 項目、6 掲出字と数えるものである。また、異体字を 2 字以上続ける場合、例えば、図の 5 行目では、「法」の異体字を「法俗法濱二正」のように列記するが、今回は、これを 1 項目、3 字と数えた。1 格を超えて異体字が数文字続く場合も 1 項目と数える。酒井憲二（1967）は、例えば「法俗法濱二正」を 2 項目とするように、字体注記が別であれば別項目として、観智院本『類聚名義抄』全体では、32,613 項目と数えている。この方式がより正確であるが、画像切り出しを機械的に行う関係で、発表者は、上記の方針で算出した。その結果は、表 1 のとおりである。なお、部首ごとの詳細は、池田（2008）を参照。

冊	1 字	2 字	3 字	4 字	5 字	6 字	7 字	8 字	9 字	12 字	項目数	字数
仏上	1, 580	496	57	16	3	2	1				2, 155	2, 841
仏中	2, 990	634	64	21	9		1	1	1	1	3, 722	4, 615
仏下本	2, 889	715	113	18	7	1		1			3, 744	4, 779
仏下末	1, 212	293	36	10	2				1		1, 554	1, 965
法上	2, 833	517	79	12	8	3	1		1		3, 454	4, 226
法中	3, 418	698	80	16	10	4	1				4, 227	5, 199
法下	2, 525	810	165	14	6	2	2	2			3, 526	4, 768
僧上	2, 163	1, 117	198	22	7	3		1			3, 511	5, 140
僧中	1, 952	945	142	23	2	3		1			3, 068	4, 396
僧下	1, 953	837	176	36	7	4	2		3		3, 018	4, 399
合計	23, 515	7, 062	1, 110	188	61	22	8	6	6	1	31, 979	42, 328

表 1　観智院本『類聚名義抄』冊毎の項目数及び字数

発表者の算出した掲出項目数は、31,979 項目は、従来算出された約 32,000 項目に合致する。掲出字数（延べ）は、42,328 字である。異なりの掲出字数の算出には、文字同定の作業が不可欠であり、今後かなりの時間が必要である。

4　観智院本『類聚名義抄』の掲出字に対する文字同定の方法

次に掲出字に対する文字同定の方法について解説する。基本方針は、各掲出字に諸橋『大漢和辞典』検字番号（以下、諸橋番号）の付与する、というものである。諸橋番号と JIS コード番号、UCS のコード番号とを対照したテーブルは既に存在するからである。諸橋『大漢和辞典』に掲載の無い漢字は、今昔文字鏡の番号を与えておくこととする。

順序としては、観智院本『類聚名義抄』の本文の冒頭から、諸橋番号を与えていけばよい話であるが、別に作成した漢字字書データベースとして、『篆隷万象名義』データベース、『宋本玉篇』データベース、図書寮本『類聚名義抄』データベースを持っており、これを利用することにした。

特に、『篆隷万象名義』は、『類聚名義抄』編纂の材料となったと考えられており、観智院本『類聚名義抄』の編者が『篆隷万象名義』をどのように使っているか、『篆隷万象名義』の掲出字をすべて採録しているかに大きな関心があったからである。

『篆隷万象名義』6帖は、弘法大師空海（774-835）の撰述、その伝本は、永久2年(1114)写の高山寺本が唯一である。原本系『玉篇』（梁・顧野王撰、30巻、543年成立）の本文の節略に加え、掲出字を篆書でも示す。『篆隷万象名義』の価値は、原本系『玉篇』の節略に徹する点にある。原本系『玉篇』は、日本に巻8、9、18、22、24、27が残存するに過ぎないからである。

発表者の作成した『篆隷万象名義』データベースには、『篆隷万象名義』の全掲出字の所在情報と諸橋番号の情報があるので、諸橋番号の順に並べ替え、観智院本『類聚名義抄』の漢字索引と照合して観智院本『類聚名義抄』の所在を書き込み、次に観智院本『類聚名義抄』の順に並べ替えて、原文での所在を確認・修正するという方法をとった。この照合作業は難渋しており、重複や誤認も含まれるので、概算の数値を示すにとどめざるを得ないが、現在のところ、『篆隷万象名義』の掲出字総数約16,000字のうち、観智院本『類聚名義抄』に採録されるのを確認できた掲出字は、約13,000字であり、採録率は約80パーセントとなった。観智院本『類聚名義抄』が『篆隷万象名義』(『玉篇』) の掲出字のすべてを採録していないという事実は今回の調査で初めて判明したものである。今後、『篆隷万象名義』と観智院本『類聚名義抄』との照合をより正確に点検することで、80パーセントという数値は若干上がると見込まれるが、観智院本『類聚名義抄』が『篆隷万象名義』の掲出字のすべてを採録していないのは間違いない。

正宗敦夫編の観智院本『類聚名義抄』漢字索引は、画数の数え方の間違いがあるようである。例えば、「濊」（諸橋番号18606）は部首内画数15画、「瀹」（諸橋番号18709）は部首内画数17画であるが、正宗敦夫の漢字索引ではいずれも14画に収めている。

濊　末蔑二音　拭滅也（法上7）

汋　余灼反、煠也、又有　瀹　俗煮也（法上9）

『篆隷万象名義』に対応の見付けられなかった観智院本『類聚名義抄』の掲出字については、順に本文を検討して諸橋番号を付ける作業を進めている。

次ページの図2に諸橋番号を付けることのできた掲出字の例を示す。

5　観智院本『類聚名義抄』の掲出字に対する文字同定の問題点

掲出字の文字同定は、諸橋『大漢和辞典』で行っているが、この辞典に掲載されていても、観智院本『類聚名義抄』の内容と齟齬する場合が少なくない。例えば「 」（法上1、図1の5行目）は諸橋番号17410の漢字「沽」と同形と認められる。観智院本『類聚名義抄』は「法」の「正」体と注記するが、諸橋『大漢和辞典』は音キョク、つゆのひかりの意とする（『正字通』「許力切」、『玉篇』（宋本）「露光也」を引く）。これは同形異字の「衝突」した例である。

例をもう一つ挙げると、「 」（法上29）は、諸橋番号17753の「渚」と同形だが、観智院本は「落」の俗字とする。一方、諸橋『大漢和辞典』は音ジャ、ジャク、城の名、水のさま（『集韻』

05　法上　諸橋 M17825　万象名義 5/089+32
風間所在　004320
天理所在　010320

05　法上　諸橋 M18498　万象名義 5/085-21
風間所在　005140
天理所在　011140

05　法上　諸橋 M17540　万象名義 5/098+21
風間所在　004430
天理所在　010430

05　法上　諸橋 M17247　万象名義 5#091+211
風間所在　005320
天理所在　011320

05　法上　諸橋 M18784　万象名義 5/093+11
風間所在　004442
天理所在　010442

05　法上　諸橋 M18700　万象名義 5/092-32
風間所在　005330
天理所在　011330

05　法上　諸橋 M18270　万象名義 5/101-12
風間所在　004510
天理所在　010510

05　法上　諸橋 M17429　万象名義 5/096+61
風間所在　005410
天理所在　011410

05　法上　諸橋 M17943　万象名義 5/083+63
風間所在　004521
天理所在　010521

05　法上　諸橋 M17487　万象名義 5/089+21
風間所在　005521
天理所在　011521

図 2　観智院本『類聚名義抄』データベース出力例 1

「人夜切、城名」「日灼切、濩渃、水大皃」）とする。これも同形異字の衝突である。

次に諸橋『大漢和辞典』に未掲載の漢字であるが、これは相当に多い（図 3 参照）。

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　004411
天理所在　010411

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　006120
天理所在　012120

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　004412
天理所在　010412

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　006140
天理所在　012140

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　004532
天理所在　010532

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　006341
天理所在　012341

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　004831
天理所在　010831

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　006411
天理所在　012411

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　004832
天理所在　010832

05　法上　諸橋 ×　万象名義
風間所在　006412
天理所在　012412

図 3　観智院本『類聚名義抄』データベース出力例 2

これには、諸橋『大漢和辞典』の掲出字の大半が『康熙字典』（1716 年刊）に依拠することに関係している。笹原宏之（2007:102）は、「国字」研究の観点から、『康熙字典』の集字の範囲に触れて、古典的な経書の使用字は網羅的に収録するが、金石文の古代の字種、通俗白話小説の俗字、各地の地域文字、仏教・道教文献の俗字は省かれており、子部、集部の書籍の字にも漏れが多いことを述べている。今後、詳細な検討が期待されるものである（池田 2006 も参照）。

6　観智院本『類聚名義抄』データベースを利用した漢字字体と古字書の研究

漢字字体の研究には、「漢字字体規範データベース」が大いに役立つ。試みに「臺」を検索してみよう。結果は図 4 のとおりである。資料についての細かな解説は省略するが、「臺」が古い字体で、『康熙字典』体の「臺」は新しい字体である。

次に観智院本『類聚名義抄』データベースを利用して、「臺」及び「臺」構成要素に持つ漢字をいくつか調べてみる。

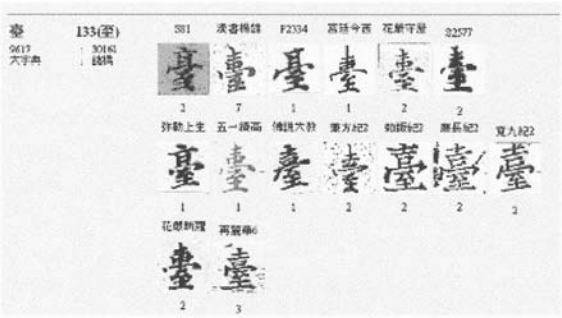
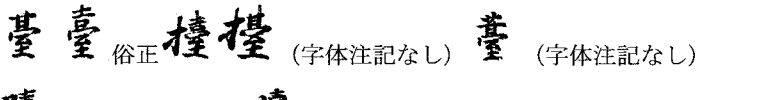
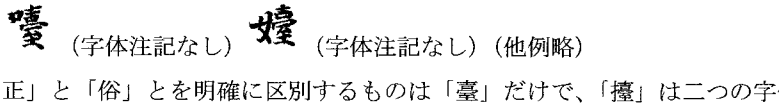


図 4 漢字字体規範データベース検索結果（一部）





「正」と「俗」とを明確に区別するものは「臺」だけで、「擡」は二つの字体を併記、「薹」は「臺」の「俗」の字体で、口偏と女篇を持つ「臺」は「正」の字体である。図 4 に示した「漢字字体規範データベース」の検索結果からは、「臺」の「俗」字体が古く、「正」字体は新しい。この漢字字体の変遷を観智院本『類聚名義抄』は反映していないように見える。こうしたところが古字書を漢字字体研究に利用する上での難しいところであるが、不統一の理由としては、漢字字体の変遷の過渡期いうことが考えられるとともに、観智院本『類聚名義抄』の編纂資料の影響が考えられる。使用頻度の高い、よく使う漢字は、正俗の字体注記が細かくなるが、使用頻度の低い漢字や僻字は字書の材料をそのまま転載することがあると推測されるからである。

観智院本『類聚名義抄』データベースを利用した古字書研究としては、掲出字の採録基準、掲出字の配列の分析が挙げられる。図 5 は言部から『篆隷万象名義』の掲出字の配列順序に合致する箇所を例に示したものである。両者の関係がよく観察できる。

図 5　観智院本言部（一部）

（参考文献）

池田証寿（1994）「篆隷万象名義データベースについて」、『国語学』第 178 集、東京：武蔵野書院

池田証寿（2003）「篆隷万象名義データベースの改訂」、『漢字文献情報処理研究』4 号、東京：好文出版

池田証寿（2006）「依據日本的古字書來從事漢語史資料研究」、浙江大學漢語史研究中心編『漢語史學報』第 6 輯、上海：上海教育出版社

池田証寿（2008）「観智院本類聚名義抄の掲出項目数と部首内配列」、『北海道大学文学研究科紀要』124 号、札幌：北海道大学大学院文学研究科

石塚晴通・豊島正之・池田証寿・白井純・高田智和・山口慶太（2005）「漢字字体規範データベース」、『日本語の研究』第 1 巻 4 号、日本語学会

酒井憲二（1967）「類聚名義抄の字順と部首排列」、『本邦辞書史論叢』、東京：三省堂

吉田金彦（1980）「類聚名義抄」、『国語学大辞典』、東京：東京堂出版

（覆製本）

『類聚名義抄』―『図書寮本類聚名義抄』、東京：勉誠社、1976 年
『類聚名義抄』、東京：風間書房、1954 年
『類聚名義抄（天理図書館善本叢書 32-34）』、東京：八木書店、1976 年

〔附記〕本稿は、平成 17 年度～平成 19 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「掲出字画像データベースの構築による『類聚名義抄』の漢字字体規範の研究」（研究代表者：池田証寿、課題番号 17520290）による成果の一部である。